鹿児島大学におけるキャリア教育プログラムの構造と各科目の役割
－社会人基礎力を中心として－

藤村一郎、河邊弘太郎、大前慶和、的場千佳世、江山

キーワード：キャリア教育、教育プログラム、インターンシップ、社会人基礎力、
PBL（Project Based Learning）、PBL（Problem Based Learning）

概要

本稿は鹿児島大学総合教育機構において実施されている「かごしまキャリア教育プログラム」について論じるものである。経産省の提唱する「社会人基礎力」が本教育プログラムの中でいかに育成されているのかを中心にすえる。「社会人基礎力」に着目するのは、同能力が仕事をする上で必要となる基礎的かつ汎用的な能力として、それら育成の社会的要請が高まっているからである。ところが、高等教育において「社会人基礎力」は重視されつつも教育方法について確立されたとは言えないであろう。鹿児島大学総合教育機構の教育スタッフは、「社会人基礎力」育成の社会的要請に応えるために、１つの教育プログラムとして「かごしまキャリア教育プログラム」を開発した。本稿は、「かごしまキャリア教育プログラム」を構成する各授業の開発意図や創意工夫を示し、それら総体が「社会人基礎力」の育成へいかに結実していくのかを論じるものである。

上記の問題関心にしたがって本稿は以下のような構成をとる。まずⅡでは、鹿児島大学の「地域人材育成プラットフォーム」の１つである「かごしまキャリア教育プログラム」の概要を論じることに始まり、以降は主要科目ごとに科目の特徴について次の順序で論じる。Ⅲ「キャリアデザイン」、Ⅳ「社会人基礎力演習」、Ⅴ「チャレンジ・ビジネス」、Ⅵ「地域キャリア・インターンシップ事前演習・地域キャリア・インターンシップ」、Ⅶ「地域キャリア・インターンシップ修了演習」の以上となる。これら科目の順序は受講生の履修プロセスに沿ったものである。

「かごしまキャリア教育プログラム」の各種科目の特徴について論じる際、次の諸点よりアプローチする。第１に授業の基本的な情報である。例えば授業の形態、教育目標、ねらいについてである。第２に、授業の構成について日程や教育の過程を論じる。第３に授業における工夫について、使用するツールや教材、教育的仕掛けなどを教育効果とともに論じる。第４として、各科目において習得されると想定できる社会人基礎力を数値やレーダーチャートによって表現し、「社会人基礎力」を中心として各科目の特性について述べる。

上記のような一連の作業や考察を通じ、「かごしまキャリア教育プログラム」の「社会人基礎力」育成のあり方を明示することで、鹿児島大学の経験が広く高等教育機関で応用されることを企図するものである。同時に、「かごしまキャリア教育プログラム」の優位点や劣位点が明らかとなることから、同プログラムの今後を展望する。

Ⅰ．はじめに

本稿は、鹿児島大学の「地域人材育成プラットフォーム」における「かごしまキャリア教育プログラム」について、プログラムの実践経験を通して、各科目の役割と全体の構造を論じようとするものである。その際に、本プログラムが力点を置いている「社会人基礎力」の育成を主題とすることで、各科目がいかに機能し有機的なつながりをもっているのか、プログラム総体としていかに構築されているのかについて論じるものである。「社会人基礎力」に着目するのは、仕事

をする上で必要となる基礎的かつ汎用的な能力として、同能力の育成の社会的要請が高まっているからである。ところが、高等教育において「社会人基礎力」の育成は必要性を認識されつつも、教育方法や指導のあり方について確立されたとは言えないであろう。鹿児島大学総合教育機構の教育スタッフは、「社会人基礎力」育成の社会的要請に応えることを念頭に、１つの教育プログラムとして「かごしまキャリア教育プログラム」を開発した。本稿は、「かごしまキャリア教育プログラム」を構成する各授業の開発意図や創意工夫を示し、それらの総体が「社会人基礎力」の育成へいかに結実していくのかを論じるものである。

Ⅱ.「地域人材育成プラットフォーム　かごしまキャリア教育プログラム」

鹿児島大学は2017年度より全学的かつ学部横断的な教育プログラムとして「地域人材育成プラットフォーム」をたちあげた。「地域人材育成プラットフォーム」とは、地域に根ざしつつもグローバルな広い視点をもった地域人材を育成する教育プログラムを提供するものである。「地域人材育成プラットフォーム」には３つの教育プログラムが用意されている。第１は地域でのキャリア形成に主眼をおく「かごしまキャリア教育プログラム」があり、第２に地域の自然や文化を学際的に探究する「かごしま地域リサーチ・プログラム」があり、第３に地域課題をグローバルな視点よりとらえる「かごしまグローバル教育プログラム」がある。

「かごしまキャリア教育プログラム」は、地元企業や自治体との連携による様々な科目によってローカルの現状や可能性について理解させ、地域的課題の解決に取り組むことのできる人材を育成することを目指している。同教育プログラムはアクティブラーニングや実地体験を重視した総計16単位のカリキュラムとなっている。また、同教育プログラムは「基礎」と「実践」とに分けられており、「基礎」の修了者が「実践」に進むことができるという２段階で構成されている（図１）。

「地域人材育成プラットフォーム」に基づく教育プログラム

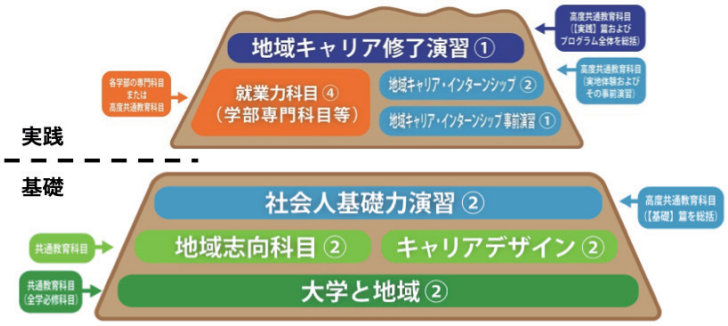


図１

ここで履修プロセスを追うことで、本教育プログラムの全体像を外観してみたい。「基礎」は次のような履修プロセスとなる。第１は新入生全員が学ぶ「大学と地域」である。同科目はローカルについて学際的に学ぶことのできる全学必修科目である。第２は「キャリアデザイン」である。同科目は「かごしまキャリア教育プログラム」のスタートアップ科目と位置づけられる。第３は、「地域志向科目」であり、共通教育科目のなかで指定された「地域志向科目」リストより２単位選択する。第４は本教育プログラムの名実ともに中核的存在（プログラム・コア科目）として位置づけられている「社会人基礎力演習」である。

「実践」は次のような履修プロセスとなる。「実践」では、第１は「就業力科目」となる。指定されたプログラム・スキル科目である「就業力科目」リストのなかより選択し、４単位履修することになっている。ただし、「地域人材育成プラットフォーム」は学際的ないしは学部横断的な

学びを重視するために、２単位は受講生の所属学部とは異なる他学部の講義を受講することが定められている。「かごしまキャリア教育プログラム」は所属学部とは異なる学際的ないしは学部横断的な学びを提供するために、独自の「就業力科目」を開講している。それが後述する「チャレンジ・ビジネス１」および「チャレンジ・ビジネス２」である。

「実践」は、上記の「就業力科目」をのぞけば、あとはインターンシップによる実地活動を中心に構築されている。すなわち第２として「地域キャリア・インターンシップ事前演習」を修得したうえで、第３に「地域キャリア・インターンシップ」[1]で実地を体験し、第４に「地域キャリア・インターンシップ修了演習」にて実習活動だけでなく、「かごしまキャリア教育プログラム」全体を総括する。本教育プログラムのインターンシップは、いわゆる PBL 型であり、地域社会ないしは地域企業の課題を解決するミッションを課せられている。事後指導である「地域キャリア・インターンシップ修了演習」では、キャリア、リサーチ、グローバルの３つの教育プログラム合同で地域に開かれたかたちの「地域人材育成プラットフォーム成果報告会」を毎年開催している。「かごしまキャリア教育プログラム」の受講生は、「成果報告会」においてインターンシップ体験を土台とした課題解決の成果について発表する。本教育プログラムは、以上のような履修プロセスで構成される。

各科目での取り組みについて論じる前に「社会人基礎力」について簡単に解説しておきたい。「社会人基礎力」は、経済産業省が2006年に産業界、教育界の有識者を集めて開催した「社会人基礎力に関する研究会」によって提唱されたもので、仕事を行っていく上で必要となる基礎的な能力を示している（社会人基礎力に関する研究会編，2006）。「社会人基礎力」は、まず「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の大きな３つの能力に大別される。３つの能力はさらに12の能力要素によって構成される。３つの能力の１つである「前に踏み出す力（アクション）」は次の能力要素によって構成される。1. 主体性：物事に進んで取り組む力、2. 働きかけ力：他人に働きかけ、巻き込む力、3. 実行力：目的を設定し確実に行動する力である。第２の「考え抜く力（シンキング）」の能力要素は、4. 課題発見力：現状を分析し目的や課題を明らかにする力、5. 計画力：課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力、6. 創造力：新しい価値を生み出す力である。３つ目の「チームで働く力（チームワーク）」の能力要素は、7. 発信力：自分の意見をわかりやすく伝える力、8. 傾聴力：相手の意見を丁寧に聴く力、9. 柔軟性：意見の違いや立場の違いを理解する力、10. 情況把握力：自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力、11. 規律性：社会のルールや人との約束を守る力、そして12. ストレスコントロール力：ストレスの発生源に対応する力となる。以上、能力要素は12となる[2]。以下では、本教育プログラムの各科目の取り組みについて論じるとともに、「社会人基礎力」の育成が各科目の中でどのように設定され、実施されているのか確認する。

Ⅲ. キャリアデザイン

１.「キャリアデザイン」の概要

「キャリアデザイン」は共通教育科目として、全ての学部学生が受講可能であり、前期と後期のそれぞれの学期で開講されている。また、「かごしまキャリア教育プログラム」のスタートアップ科目として位置づけられている。本学ではキャリア教育はさまざまな科目において部分的に実

[1]「かごしまキャリア教育プログラム」における就業体験を主とする実地体験は、2023年度より３年生向けの「地域キャリア・インターンシップ」と２年生向けの「地域キャリア実習」とに分けて開講されているが、煩雑となるために名称を統一し「地域キャリア・インターンシップ」と表記することとした。

[2] 社会人基礎力は、2006年に経済産業省によって提唱された。2018年には新たに「人生100年時代の社会人基礎力」が提示されている。

施されているが、「キャリアデザイン」は入学したばかりの学生がはじめて学ぶキャリア形成を主題とする授業となる。実際に受講生の60～75％は１年生で占められており、残りのほとんどは２年生であり、低学年むけの科目と言える。科目の目的は、第１にキャリア形成を意識しつつ大学で学んでいけるよう、キャリア教育の基礎知識を獲得し、大学での学びの姿勢を整えることにある。第２に、自己理解を深め、自身のキャリア形成をとりまく社会経済状況を知った上で、キャリアデザインの基本的な方法を身につけることである。第３に、自分自身の適性や価値観の気づきにくわえ、他者を尊重する多角的なものの見方を身につけることにある。

上記の目的を達するために、第１に次のような知識を学ぶ。自己理解の方法、キャリア形成に関する現状や理論、ワーク・ライフ・バランスとディーセントワーク、ワークルール、男女共同参画社会、認知的能力と非認知的能力、キャリアデザインの具体的方法などである。第２に他者のキャリア経験を学習する中で、自己のキャリア観を見つめ直し、キャリアデザインをより豊かなものとする。たとえば地元で働く教育熱心なエキスパートをゲスト講師としてむかえて、ライフヒストリーや履歴、業種・職種、仕事内容、価値観や仕事の醍醐味などについて学習する。これらの知見をいかに整理し、理解していくのかはすぐ後に論じる。

２．「キャリアデザイン」の構成と取り組み

それでは「キャリアデザイン」の授業構成を外観したうえで、具体的取り組みについて論じていきたい。授業の構成は以下の４つのパートに分けることができる。まずはキャリア形成に必要な基本的知識を学ぶ第１パート、次にキャリア形成に資する実践的スキルや知識を獲得する第２パート、そして実際に働く人々より自己のキャリア形成に必要な要素を学ぶ第３パート、最後に第４パートとしてキャリアデザインの方法である。

まずはキャリア形成に必要な基本的知識を学ぶ第１パートの内容から確認する。「キャリアデザイン」では第１回目に「キャリア」概念の解説において「外的キャリアと内的キャリア」について学ぶ。

エンプロイアビリティの検討の中で個々人の職業能力は、次の３つの層に区分されることがある。第１は、職務遂行に必要となる特定の知識や技能などの顕在的なもの、第２は協調性、積極性等職務遂行にあたり、各個人が保持している思考特性や行動特性に係るもの、第３に動機、人格、性格、信念、価値観等の潜在的な個人的特性に関するものの３層である（木村周, 2016：p.76.）。このうち第１は顕在的で見えるものであるが、第２と第３のものは顕在的なものだとは言いがたい。これら３つの能力を個々人のキャリアの構成要素として捉えた場合、より端的には次のように表現できる。すなわち、第１は知識、技能、資格、人脈であり、第２に行動特性、思考特性、態度、習慣、第３にマインドや価値観である。第１に近づくほど目えやすく、第３に近づくほど見えにくい要素となる。受講生は、これらのうち第１が指すものを「外的キャリア」とし、第２と第３が指すものを「内的キャリア」として概要を理解する[3]（村山昇, 2018：p.36.）。

「内的キャリア」を学習する理由は、対比される「外的キャリア」だけが重要なのではなく、「内的キャリア」も同時に育成する必要があることを認識できるからである。入学したばかりの受講生は、スキルと知識を試される大学入試を終えたばかりで、「外的キャリア」に目を奪われがちである。しかし、入学まもなくの段階で「外的キャリア」を切り出して見せることで、キャリア形成には知識やスキルといった「技」だけでなく、それ以外のマインドや価値観を底とする「心」の育成が必要であることが容易に理解できるようになる。

[3] ただし、ここで用いた「内的キャリア」は「キャリア・アンカー」の概念を論じたエドガー・シャインの「内面的なキャリア」と同一の概念ではない（エドガー・シャイン / 金井壽宏訳, 2003：p.11.）

第１パートでは、上記のような「キャリア」概念の理解以外に、クランボルツの「プランドハップンスタンス」や「セレンディピティ」の概念、大学生を取り巻く社会経済情勢の変化、多様な働き方、職種・業種の基礎知識、大学生としてのマナー講座などで構成された知識を学ぶ。

第２パートは、キャリア形成に資するスキルや知識を中心に学ぶ。第１パートと比べるとより発展的かつ実践的なスキルや知識について身につけるパートである。学習項目をあげれば、キャリア情報の収集法や情報発信の仕方、ワーク・ライフ・バランスとディーセントワーク、ワークルール、男女共同参画社会、認知的能力と非認知的能力などである。より具体的な例をあげれば、キャリア情報の収集法では、お馴染みの就活用情報誌や書籍という話ばかりではなく、キャリア形成に連関する新聞の読み方や情報の整理の仕方について学ぶ。新聞には、政治、経済、社会情勢といった学生のキャリア形成を取り巻く環境についての情報が多数掲載されている。これらを有効活用する方法について理解する授業をおこなっている。

第３パートでは、受講生が、実際に地元で働くエキスパートの講話を聞く中で、ゲストスピーカーの「外的キャリア」とともにそれ以外の部分を抽出して分析する段階である。ゲストスピーカーにはご本人のライフヒストリーや履歴、業種や職種、仕事内容、自己の価値観や仕事の醍醐味などについて講話してもらう。ゲストスピーカーの布陣は、地元で働く教育に情熱を持つ方々であり、会社員や公務員、自営業など業種や職種にバラエティを持たせつつ、ジェンダーバランスに配慮した４名前後である。

受講生は、ゲストスピーカーの講話から次のようなことを学ぶ。第１に「外的キャリア」やライフヒストリーを聞く中で、ローカルにおける業種や職種それにサプライチェーンの構造を知り、「外的キャリア」を形づくるキャリアパスや職場以外での社会的役割あるいは家庭内での役割をも理解しようとする。「外的キャリア」のためにどのような教育課程や経験を経て、いかなる資格やスキルを必要としたのか、結婚、出産、子育て、転職や退職などのライフステージにおいていかなる選択をしてきたのかなどを生の声より学ぶ。もっともゲストスピーカーのほとんどは、地元で働く有能な方々ばかりである。そのためローカルのキャリアのありようについて自然に学ぶことになる。ローカルならではのメリットや課題点、さらに課題点克服のための工夫などについて学習する機会でもある。

受講生は、その上で「外的キャリア」以外の部分、すなわち行動特性、思考特性、態度、習慣、マインド、価値観などの目に見えない抽象的な特性をつかみ出すように課題を与えられている。受講生は、第１パートで学んだキャリアに関する抽象的な諸概念について、社会人の経験や具体的事例を通じてさらに理解を深める。

第４パートでは、ライフラインチャート作成による主観的な自己理解、検定ツールを活用した客観的な自己理解、日本版 O-net を活用した職種・業種理解やそれらに必要な諸能力の整理、そして上記を統合した総合的なキャリアデザインの方法を学ぶ。キャリアデザインを自作する際には、マインドや価値観にしたがった30歳までの目標を掲げ、第１は知識、技能、資格、人脈のカテゴリーと第２に行動特性、思考特性、態度、習慣のカテゴリーとに分けて記述して、より総合的にキャリアをデザインすることを試みる。

３．「キャリアデザイン」における「社会人基礎力」の育成

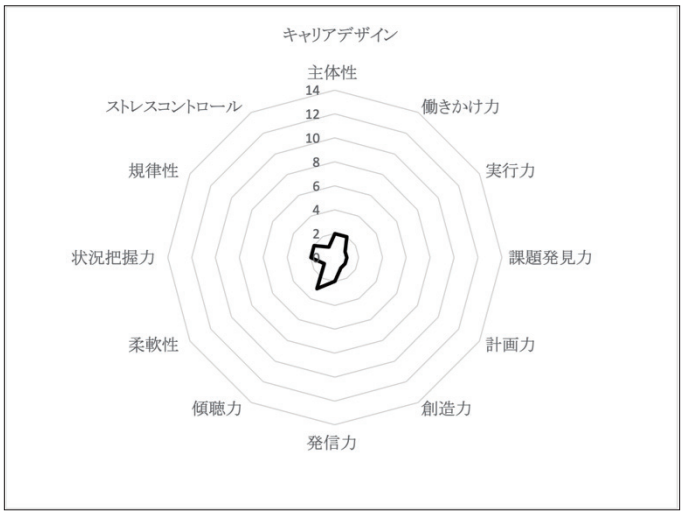
以上のように「キャリアデザイン」は構成されている。以下では、本科目において「社会人基礎力」の育成がどのように埋め込まれているのか論じる。

本科目では、全15回のほとんどの授業において初歩的ながらグループワークを導入している。グループワークは「社会人基礎力」のうち、「前に踏み出す力（アクション）」「チームで働く力（チームワーク）」の育成に資する。本科目は知識やスキルを学ぶ場面が多く、座学中心となりが

ちである。このため、授業の振り返りの部分でグループワークを導入することで、アクティブラーニングの要素を追加している。グループワークでは、細かなインストラクションを与えて、指示通りに作業すればワークを進められる仕掛けとなっている。例えば、グループワークでは受講生が発話しなければ対話にならない。誰から発話していくのか、何について発話するのかといった発話の順番や内容についての指示を細かく秒刻みのインストラクションとして示す。このことによって受講生は指示通りに作業する中で、グループワークの手順を理解するようになり、第５回を過ぎたあたりから細かなインストラクションを示さずとも、自主的にグループワークを進めていくことが可能となっている。初歩的なグループワークへの習熟は、「キャリアデザイン」の次に履修する「社会人基礎力演習」におけるより高度なグループワークへの準備となる。

グループワークで扱う内容は次のとおりである。ゲストスピーカーへの質問を授業時間内に教室内から集める際にもグループワークを活用している。質問内容についてグループで検討させ、クラスで有益となる質問へと集約するミッションを与えている。ゲストスピーカーへの質問を集約するグループワークは授業におけるポイントを振り返る機会にもなっている。

「前に踏み出す力（アクション）」という点について、上述のように授業中にもそれを促すアクティブラーニングを設定しているが、授業時間外においても主体的な行動を起こさざるを得ないような仕掛けを用意している。たとえば、次のような課題を与えている。本学のキャリア形成支援センター主催のキャリア系イベントに受講生自身で足を運び、地元を中心とした多様な企業ないしは事業所の業種や職種についての知識を得るということである。キャリア系イベントとは、低学年から参加可能な企業説明会にくわえ、先輩や地元の経済人と対話できる機会を指す。課題の狙いは、「前に踏み出す力（アクション）」を発動させることである。受講生は、アクションを起こすことで、イベントでさまざまなキャリアを有する社会人（学外者）と出会い、コミュニケーションや対話を行うことになる。普段の学生生活の中では出会うことのない社会人（学外者）と対話する経験が、自己のキャリア形成についても、ビジネスや社会の仕組みについても考えるきっかけとなり、同時に「社会人基礎力」の実践にもつながっている。「キャリアデザイン」の取り組みは社会人基礎力のレーダーチャートで表現すれば下図のようになる。このレーダーチャートは、該当科目が想定する社会人基礎力の伸長について、便宜的に３点を満点として数値化したものである。



Ⅳ.「社会人基礎力演習」

1．授業の形態・教育目標・ねらい

「社会人基礎力演習」は、理論と実践との両面から文字通り社会人基礎力を学ぶことができる高度共通教育科目である[4]。「かごしまキャリア教育プログラム」におけるカリキュラムマップにおいては、「基礎」に分類され、２年次以上を対象としている。本科目は、このプログラムのプログラム・コア科目であり、中核的存在と位置付けられている。本科目の主要な目的は、学生が社会人基礎力を理解し、身につけ、発展させることであり、社会人基礎力における12の能力要素すべての向上を目指している。

具体的な学修目標としては、以下の４点が設定されている。（１）社会人基礎力の内容を理解し、説明できる。（２）社会人基礎力を身につけ、実生活で活用できる。（３）協働能力を特に強化し、協働作業を通じた提案ができるようになる。（４）ファシリテーションスキルの基礎を身につけ、グループワークで効果的に活用できる。

2．「社会人基礎力演習」の構成と取り組み

授業は、集中講義形式で土曜日を中心に４週にわたって行う。授業の進行は週ごとに異なり、初めの２週は講義形式で経営学理論を解説し、今後求められる人材像について考えさせる。また、テーマパークを事例としてホスピタリティの重要性の理解を深めさせている。講義形式であるものの、トピックごとにペアワークを設け、ディスカッションを通じて社会人基礎力のイメージ形成を促している。３週目以降はPBL（Project Based Learning）を活用した演習形式に移行し、ファシリテーションを基盤にグループで課題解決に取り組ませている。まず、事前に各自がイメージしてきた社会人基礎力を、グループ内で整理し共有させる。グループ活動の基盤が整ってからは、複数のバーチャルな課題に取り組みながら、協働能力や提案力の開発を目指していく。特に最終週では、地元企業の社長から与えられた新規事業企画の立案というミッションに取り組む。受講生は、鍛えてきたファシリテーションスキルを駆使して解決策を提案するプレゼンテーションを行う。

最終回の授業では振り返りを行っている。振り返りでは、受講生が自身の学びや成果を振り返り、他のグループとのフィードバックやディスカッションを通じて、さらなる学びを深めている。

3．授業実施上の工夫

本科目の授業デザインに際しては、「対極の価値」をバランスさせるように心がけている。対局をバランスさせるには２つの方法があり、程よい中庸を選択する方法と、両極のどちらをも重視した結果としてバランスさせる方法である。本科目は後者であり、具体的には４週間の集中講義形式を取りつつ、各週の授業内容やスタイルを徐々に変化させることで実現している。変化させる授業スタイルの中身でも対極のバランスを活用しており、講義形式から演習形式へ、教員誘導スタイルから学生主体スタイルへといった変化を組み込んでいる。たとえば、グループワークにおいても、最初は教員がファシリテーションの主体であり、受講生を誘導しながら議論を進めさせている。一方、授業が進行していくにつれて、ファシリテーションも学生が主体となり、教員は議論の中には入ることはない。このスタイルの変化も時期を区切って突然行うわけではない

[4] 高度共通教育科目は、共通教育センターが開講する共通教育科目の一区分であり、いわゆる教養教育とは異なる性質の科目として位置付けられている。すなわち、授業内容が専門教育相当であり、高度共通教育科目の単位を専門教育の卒業要件単位数に算入するかは各学部の判断に委ねられている（共通教育の卒業要件単位数には算入されない）。高度共通教育科目の多くは地域人材育成プラットフォームに関連して開講されており、主として総合教育機構の教員が授業担当教員となっている。

ため、受講生自身も気づかないうちに自発的に議論に参加している。

本授業の特徴の１つは、現実に存在する企業へ事業企画の提案という PBL を行う点にある。PBL を取り入れるにあたっては、経営学の理論的理解を前提に、バーチャルな課題に取り組みながら手順を学んでいき、最後に地元企業の社長からのミッションという現実的課題へと変化させている。このミッションにおいては、受講生に対してその企業の従業員になったつもりで行うよう求めている。学生は、事前にその企業のリアルな課題を調査し、自分たちが考えた企画の実現を阻む要因についても分析させ、全く新しい企業戦略を考えさせている。当該企業の強みと弱みを分析した上で、新規事業のアイデアを提案させるものであり、最終的に、対面で参加した当該企業の社長が各企画の採否を決定している。事前に与える情報量を制限するため、受講生は積極的かつ入念に調べ学習を行い、経営会議に向けチームとしての戦略を練ってくる。身近にある地元企業のリアルな課題を調べるという点が、学生にとっては取り組みやすい課題設定になっていると考えられる。協力企業の社員になりきった擬似経営会議（ロールプレイ）では、社長本人に実現可能性のある企画を提案することが課題となっていることから、学生はやりがいと当事者意識をもって課題に取り組むことができる。企画が採用されたチームも採用されなかったチームも、グループプレゼンテーションに対し達成感を感じていることが、授業終了後の感想に表れていた。

このように対極を利用した授業デザインによって、受講生は過度の負担をすることなく自己変革が可能となっている。この授業デザインの効果は、授業終了後に実施される学生による授業アンケートの自由記述からも見て取ることができ、極めて高い評価を受講生から得ることに成功している。

ペアワークやグループワークにあたっては、どれだけ積極的な発言を促すことができるかが問題となる。本科目では、手順を示すとともに、あらかじめ自身の発言内容を考えさせてから、ディスカッションを行うことを徹底させている。特に、新たにペアやグループを組んだ際には、「チェックイン・シート」を作成させ、それをプレゼンテーションしながら話をさせるという「チェック・イン」をディスカッションにおいて入念に実施している。これらの取り組みによって、密度の濃い対話が可能となり、グループの組み換えを実施しても、臆することなく発言する様子が認められている。

また、集中講義形式を取ることのメリットも活かされている。通常の授業形態であれば、座学の６コマなどは、ともすると受講生にとって中弛みを産む可能性があるが、本科目では短期集中で行うことで、一気に我々の世界に引き込むことができている。

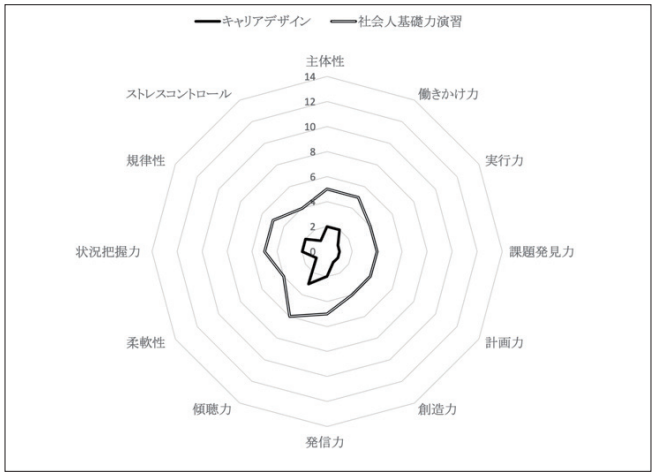
以上の授業構成から、本授業は、受け身の受講、具体的思考が不得手、発言・協働が苦手という学生像に対し、座学でありながらも思考の深掘りをもたらす個人を育成し組織的行動を促進するものとなっている。

４．想定される「社会人基礎力」の伸長

先述したように、本科目の目的は「社会人基礎力」における３つの能力すべてを身につけ、向上させることにある。特にどの要素をというのではなく、バランスよく全ての要素の向上を目指している。本科目の受講生が２年次以上であるため、本学では「キャリアデザイン」や１年次に受講する初年次必修科目を通じて、グループワークを実践してきていることから、「前に踏み出す力（アクション）」や「チームで働く力（チームワーク）」についてはある程度受講前の段階で醸成されている。これらのさらなる向上は先述したチェック・インや対極のデザインの効果によって、授業後半では極めて能動的なコミュニケーションが成立している様子が認められる。「考え抜く力（シンキング）」においても同様である。徐々に複雑化していくように設定された PBL

の課題も相まって、学生が提出している各種レポートからも、受講生一人ひとりが、より多面的かつ包括的な考察ができるように変化していることが認められている。

以上のように、本科目の受講を通して、「社会人基礎力」の各要素は向上するものと考えられるが、本科目では、実際に受講生の社会人基礎力をセルフチェックによって測定している[5]。その結果からも、12項目全てについて１％水準で有意なスコアの上昇が認められており、この中でも、特に「前に踏み出す力」を構成する主体性や働きかけ力とともに、「考え抜く力」を構成する課題発見力の向上が著しかった。



Ⅴ.「チャレンジ・ビジネス１および２」

１．授業の概要

「チャレンジ・ビジネス１および２」は、プログラム・スキル科目としてそれぞれ２単位で開講される高度共通教育科目である。ここでまず、プログラム・スキル科目について理解しておきたい。

プログラム・スキル科目の大部分は学部が開講する専門教育科目の中から指定されており、一部は総合教育機構が中心となって提供している高度共通教育科目である。高度共通教育科目として開講されるプログラム・スキル科目のうち学際的な内容であると認められる科目については、他学部開講科目とみなされる仕組みが用意されている。

「チャレンジ・ビジネス」は、PBL（Project Based Learning）の形式をとる授業科目である。簡潔にその授業内容、すなわちプロジェクトの内容を紹介するならば、サツマイモを受講生自らの手で栽培、収穫し、さらに焼き芋に加工して大学祭にて販売するという内容である。課題解決の要素が極めて強い授業科目となっている。

「チャレンジ・ビジネス１」は前期集中講義形式をとり、主として水曜日の３～４限を利用した不定期開講となっている。サツマイモの栽培という農学的な知識・スキルを活用しつつ、プロジェクト・マネジメントを体験的に学ぶ他、焼き芋販売イベントのビジネス・モデルを構想することから、学際的内容であるとの認定を受けている。４～７月にかけて授業を実施しており、農作業の実施が天候に大きく左右されることから不定期開講のスタイルとなっている。授業時間外学習時間との峻別は困難であるものの、総授業時間数は30時間を大きく超えており、総学修時間数も90時間を大きく超えているのが実情である。

「チャレンジ・ビジネス２」は後期集中形式をとり、「チャレンジ・ビジネス１」から連続的に

[5] 大前慶和、藤村一郎、浅野陽樹、的場千佳世、河邊弘太郎（2023）「キャリア教育科目『社会人基礎力演習』の取り組みについて」として第71回九州地区大学教育研究協議会において発表。

授業が展開される。具体的には、夏季休業期間に入る８月の活動からが「チャレンジ・ビジネス２」であるとみなされる。学生は夏季休業中も引き続き害虫防除や除草といった圃場管理にあたる他、９月中旬～下旬にはサツマイモの収穫作業に取り組む。収穫したサツマイモは、その後、熟成させる必要があり、これらの管理も受講生の課題である。10月に入り、後期授業が開始されると、主として水曜日の３～５限を集中的に利用して焼き芋販売イベントの準備を行い、11月の大学祭にて出店する。大学祭イベントの展開も授業の一環である。「チャレンジ・ビジネス１」と同様に授業時間外学習時間との峻別は困難であるが、総授業時間数30時間、総学修時間数90時間を大きく超えて受講生たちは活動し、学んでいる。

２．教育目標・ねらい

「チャレンジ・ビジネス１および２」は、連続して受講することを原則としている。プロジェクトを完結させるプロセス、あるいは提示されたビジョンを実現させる苦労こそが、社会人基礎力の伸長を強力に促進するためである。

プロジェクト運営においては、極めて多様な挑戦を受講生は強いられる。したがって、PBL形式の授業は、社会人基礎力を包括的に底上げできる点に特徴がある。シラバスでは以下のような学修目標が明示されている。

第１に、個々人の個性を尊重しつつ、協働作業ができるようになることである。個性および協調性の発揮は両立させるべき資質なのであり、個々人が自身の適性を理解しつつ役割を担い、同時にそれら個々人の努力を共通目的ないしビジョンの下に結集できてこそ、プロジェクト運営が成り立つのである。

第２に、社会の発展に資するビジネスを構想し、適切な利潤を獲得できるだけの倫理基準を身につけ、ビジネスの形で表現できるようになることである。ビジネスを実践するにあたっては、遵法・準則に限らず適切なビジネス倫理を身につける必要がある。また、ソーシャルビジネスの言及を待つまでもなく、そもそもビジネスとは社会の発展に資する形で展開されるべきであり、適切な経営理念の下で進められてこそはじめて持続可能となると解釈される。こうしたいわばビジネスの社会的側面を的確にビジネス・モデルとして表現することが求められる。

第３に、多様に変化する環境から問題・課題を抽出し、解決に向けた主体的な行動がとれるようになることである。さらに第４に、個々人内での学際的思考、また多様な専門分野を背景とする受講生同士の行動を通じて、知識の新結合を実現できるようになることである。本授業で受講生に求めているのは受動的な学修態度ではなく、主体的に問題や状況を把握し、解決していく態度である。問題解決にあたって必要となる能力には創造性を挙げることができ、教員の指示を待つことなく試行錯誤を繰り返すことが求められる。

第５に、地域を構成する一員であることを自覚し、まちづくりに資するサツマイモ・ビジネスを創造できるようになることである。大学祭においては、単なる焼き芋販売イベントとならぬようにやや高度な課題を与えるようにしており、焼き芋販売にあっては一般市民を顧客としつつ、授業ないしプロジェクト運営を通じて学んだことを伝達することにより、社会に無批判に存在する固定観念を覆して欲しい、と受講生には伝えている。

３．「社会人基礎力演習」との科目間連携と「地域キャリア・インターンシップ」との比較

「社会人基礎力演習」では、社会人基礎力の視点から自身を見つめ直し、自己の有する潜在能力に気づくことが受講生には求められる。そこで教員はいくつかの配慮を行なっており、発言しやすい環境を用意したり、協働しやすいテーマを意図的に用意するよう心がけている。受講生の自己肯定感が増す結果となるよう配慮しているといえる。

しかしながら現実社会においては、より厳しい組織内環境で発言や個性の発揮が求められるのが常である。厳しい現実社会に受講生が適応できるよう教育すべく開設したのが、すなわち「チャレンジ・ビジネス」に他ならない。よって、教員は学生をコーチングしつつも、学生自身の試行錯誤を促すような指導スタイルをとっている。

さて、「社会人基礎力演習」で意識させられた社会人基礎力に関して、受講生が現実社会で活用する機会として、「チャレンジ・ビジネス」に加え「地域キャリア・インターンシップ」も用意されている。ここでは、「地域キャリア・インターンシップ」と「チャレンジ・ビジネス」を簡単に比較しておきたい。

両科目ともに、課題解決の要素の強い科目である点は共通である。これはPBL科目の一般的な特性といえる。

一方で、相違点もある。例えば、「地域キャリア・インターンシップ」ではおおよそ現実のプロジェクトを動かすことは稀であるのに対して、「チャレンジ・ビジネス」では実際にプロジェクトを受講生自ら運営する点が特徴的である。その際、ビジネスの大きな要素であるカネの流れも体験することができ、受講生は仕入れ等利益獲得に直結する費用負担を行い、最終的には利益処分まで体験する。もっとも、利益獲得に直結しない備品類の貸し出し等を教員が行なっており、また損失の発生リスクを限りなく低く抑えるよう授業をデザインするなど、教員が相当程度の支援を行なっていることから利益の発生は予定調和的である。加えて、適正利潤を超えて利潤獲得を目指す態度は指導の対象としており、ビジネスの社会的側面の問題も取り扱っているといえる。

また、「地域キャリア・インターンシップ」にて与えられる課題・解決のためには社会および市場、あるいは顧客層を広く想定する必要があるのに対して、「チャレンジ・ビジネス」で接点を持つ社会とは大学キャンパス内のコミュニティであり、顧客は大学キャンパス周辺の住民など狭く限定されている。ステークホルダーの範囲が狭く、数も少ない状況であれば、受講生の取り組みやすさは格段に上昇することとなる。

つまり、「チャレンジ・ビジネス」は、本格的にプロジェクトを運営してはいるが、受講生が取り組みやすい状況も事前に用意できており、適切に受講生の教育が可能な授業科目となっているといえる。

４．授業実施上の工夫

第１に、課題の内容を工夫し、そう簡単には実現できないビジョンを提示するようにしている。2022年度および2023年度を例にとると、単なる焼き芋販売イベントではなく、受講生の個性が発揮された、当該プロジェクトチームにしか実現できないような販売イベントとするよう、ビジョンを提示している。さらには、いくつかの条件も提示しており、サツマイモ栽培に実際に携わったからこその何かを表現すること、市場流通における規格の内容に対して新しい価値を示すこと等を指摘することができる。簡単には実現できないビジョンを提示することにより、受講生自身の持つ先入観、あるいは当たり前に受け入れている価値観をも覆すダブルループ・ラーニングの実現を求めているのである。

第２に、教員から受講生に提供する情報を最小限としている。この工夫により、受講生はまず自ら徹底して情報を調査する必要に迫られる。また、前例（過年度の受講生の取り組み内容や発揮したユニークネス）の紹介も最小限としている。受講生自らの努力により創造性を発揮することは学修目標の１つなのであり、試行錯誤せざるを得ない状況を作り、アイデアを数多く出すよう指導している。

第３に、履修制限を行なっている。理想的には12名前後と考えており、これは４名で構成され

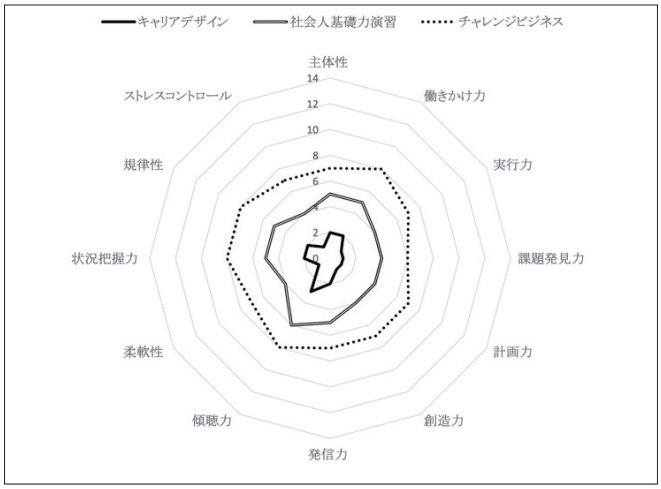
る３チーム体制を想定した数字である。人数が多くなると不可避的にフリーライダーが出現してしまい、主体性の発揮につながらないための措置である。

第４に、「事前に教員と打ち合わせをしないか」と受講生に声をかけるようにしている。プロジェクト運営は一見簡単そうに受講生の目に映るかもしれないが、非定型的意思決定の積み重ねが求められることから、実際の負担感はかなり重くなる傾向にある。特にリーダーに指名された受講生の負担が過度に重くなってしまうため、事前に教員と打ち合わせを行い、原案作成の支援を行なっている。

第５に、多く「社会人基礎力演習」での工夫を継続している。チェックイン・シートの用意とチェックイン作業の重視、発言しやすい雰囲気づくり等である。ただし、「社会人基礎力演習」では小グループでのディスカッションを組み入れることにより発言のハードルを下げるようにしているが、「チャレンジ・ビジネス」では個人の見解を堂々と発表するよう指導している。常に小グループで事前に相談という形式では、現実社会に適応できないと考えるためである。

５．想定される社会人基礎力の伸長

PBL の大きな特徴の１つは、バランスよく全ての社会人基礎力を鍛えることができる点にある。特に、現実社会との接点を有する課題を解決しようとするならば、多面的な思考及び判断が要求されると共に、チーム・メンバーとの協働とコミュニケーション、責任ある行動等が求められる。さらには、課題の解決およびチーム内の人間関係の構築において強いストレスにさらされることが多く、ストレス・コントロールも要求される。修了演習がカリキュラム全体の振り返りを意味しているのに対して、PBL 科目である「チャレンジ・ビジネス」や「地域キャリア・インターンシップ」は教育の仕上げの役割があるといえる。



Ⅵ．「地域キャリア・インターンシップ事前演習」および「地域キャリア・インターンシップ」

１．「地域キャリア・インターンシップ事前演習」の授業の概要

「地域キャリア・インターンシップ事前演習」はインターンシップに赴く前の事前指導である。「かごしまキャリア教育プログラム」の「基礎」の修了者が進むことのできる「実践」の科目であり、「基礎」で培った社会人基礎力等の能力をさらに磨く授業である。

本科目は課題解決力の向上を図るとともに、社会人基礎力の向上やビジネスマナーの習得を目指す。本教育プログラムのインターンシップは課題解決型であるため、本科目では課題の事前分析に重点を置いている。授業では、課題解決のための事前資料を作成させ、グループワークによるプレゼンテーションなどを通じてアクティブラーニングを実施している。

シラバスでは本科目の学修目標は次のように示されている。第１に、地域課題を発見し解決す

るための手法を理解し、活用することができる。第２に、課題解決に向けて、主体的に行動することができる。本科目は通常の座学より、学生が自ら行動する時間を多く設けている。多くの時間は学生が課題の把握と事前提案に向けて、調査及び分析することで主体性を高めることができる。第３に、プレゼンテーションスキルを習得し、課題解決のための提案をすることができる。課題解決の手法を活用し、論理的に事前資料を作成し、発表することでプレゼンテーションスキルの復習とスキルアップを目指す。第４に、社会人としての職業マナーの基本を習得し、実践に移すことができる。

２.「地域キャリア・インターンシップ事前演習」の授業の構成

2023年度の場合、最初の３回はオンデマンド授業で実施した。第１回目の授業では働くことの目的や意義等を解説し、選考にあたって企業がなぜ「コミュニケーション能力」、「主体性」を重視するのか、大学で汎用的能力がなぜ重視されるようになったのかを授業後のレポートとして提示している。その目的は学生の就業意識を育成し、学生が汎用的能力の必要性について考えることで、自身の長所や短所を洗い出し、自己理解を深めることである。第２回目の授業ではインターンシップによる能力形成と課題解決型インターンシップの意義を解説し、学生自身が伸ばしたい能力、インターンシップに参加する目的などを授業後のレポートとして提示している。その目的は自己理解をさらに深め、インターンシップに参加する目的を明確にすることである。第３回目の授業では３C 分析と SWOT 分析の手法を解説し、３つの視点で受入れ先の強みと弱みを分析することを授業後のレポートとして提示している。その目的は受入れ先とその業種ないしは業界を分析し、受入れ先への理解を促進することである。以上３回の授業は、自己理解を深め、課題分析の応用手法を習得した上で本格的な課題解決に挑む準備を整えることを目的としている。

第４・第５回の授業は主に課題解決の手法と要点を学び、目指したい未来像から逆算してやるべきことを設定するというバックキャスティングの手法でインターンシップ参加前とインターンシップ中の具体的な行動を計画する内容である。第２回目のオンデマンド授業では自己成長において明確な目標を設定したが、今回の授業は課題解決において明確な目標を設定し、計画を定めることを目的としている。そのため、フォアキャスティングよりバックキャスティングの手法を導入し、未来像から逆算する方法でより明確な計画が立てられることを意図している。

その後の授業内容は主に受入れ先の課題に関する事前資料の検討である。第６回目の授業は学生に各受入れ先の課題分析、課題解決の計画などに関する発表資料を事前に作成させ、個別指導を行う。発表資料の内容は主に「企業の基本情報」、「課題の提示」、「課題の原因等」、「現在の取り組み内容」、「企業の強み、弱み」、「解決のための方法、アイデア等」、「インターンシップに行くまでにやるべきこと、現場でやること」から構成されている。第７回目の授業では、異なる実習先のメンバーとグループを組み、事前資料を発表し、意見交換を行う。以上の２回の対面授業を通して、受入れ先や課題に対する理解を深めることが主な目的である。最終授業ではマナー講座となっており、マナーの基本や大切さを学ぶとともに、グループワークを通して実践する。

３.「地域キャリア・インターンシップ」の授業の概要

本科目は事前演習を経て、学生が受入れ先に赴き、現場研修に参加する。本インターンシップは一般的なものとは異なり、課題解決型である。特徴をあげれば以下のようになる。

第１に、課題解決の要素が強いことである。受入れ先が提示した企業課題、地域課題に対して、事前分析や現場研修を通じて現状を理解した上で、学生の視点で解決策を提案することが目標となっている。第２に、鹿児島県内の地元企業や自治体での現場研修になっていることである。地

元企業や自治体との連携に基づき、企業課題、地域課題に取り組むことで、地域が有する可能性や魅力などに触れる機会となっており、地域理解を促進することを意図している。第３に、中長期の現場研修になっていることである。本プログラムはワンデーや５日間以内の研修ではなく、10日間として設定している。実際の業務体験を含め、従業員との共同作業を行うことで、よりリアルな職場体験が可能になるため、社会人基礎力や職場適応力の向上が期待できる。

本科目の内容は、インターンシップを通して、企業や自治体が抱えている課題の解決に向けた企画や提案を提示することにある。本科目の学習目標には次の４つを掲げている。第１に、大学での勉学が実社会でどのような形で生かせるのかを理解できるようになることである。第２に、コミュニケーション力や対人調整力などの社会的スキルを高め、他者と協働できるようになることである。第３に、課題および突発事項に対して課題解決力を発揮できることである。第４に、就業意識や職場適応力を高め、今後の自らのキャリアに関して検討できるようになることである。

４.「地域キャリア・インターンシップ事前演習」の授業の構成

現場研修は８月中旬から９月下旬に渡り10日間で実施され、2023年度は22名の学生が17のプログラムに参加した。受入れ先によっては、連続の日程で実施する場合もあれば、そうでない場合もある。また、プログラムの内容は各地元企業や自治体の特色や強みを活かしたものになっている。

図２　現場研修プログラム概要の例（鹿児島大学キャリア形成支援センター，2023：p.17.）

内容	目安	概要
オリエンテーション	１日	受入れ先概要説明 インターンシップ課題の説明 社内見学など
現場研修	２～５日	就業体験、現地調査など
現状の理解と整理	１～２日	課題に係る現状整理（SWOT 分析など）、情報収集、背景調査など
課題解決案の作成	２～４日	企画試案の作成・アイデア出し 中間発表 最終発表資料作成
最終発表	半日～１日	最終発表、受入先によるフィードバック

プログラム内容は各企業や自治体により異なるが、図２が示しているのは多くのプログラムに共通している流れである。学生は10日間の中で、５日間以上の就業を体験しつつ、受入れ先の課題に対して情報収集や分析を行う。企画案を練り直した後、最終発表資料を作成し、プレゼンテーションを行う。また、学生はインターンシップ参加中に、日報を作成する。日報作成の中で業務を通じた学びを整理する。日報の中に受入れ先からのフィードバックを書く欄を設けており、学生にはできる限りフィードバックをもらうよう勧めている。他者からの視点を入れることで、客観的に自分を見ることができ、振り返りの効果を向上させ、学びの効果を高めることが企図されている。

５．想定される社会人基礎力の伸長

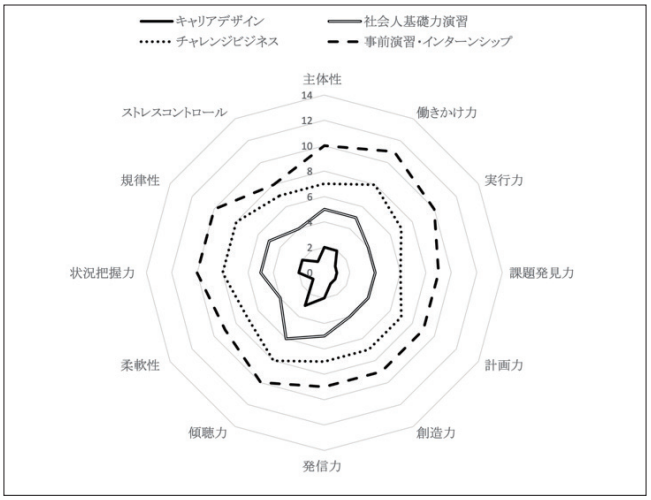
「地域キャリア・インターンシップ事前演習」と「地域キャリア・インターンシップ」の２科目を通じて、社会人基礎力が全面的に向上することが想定される。以下は社会人基礎力の具体的な伸長について論じていく。

第１に、「前に踏み出す力」すなわち主体性、実行力および働きかけ力が向上すると思われる。本インターンシップでは、課題解決の要素が強いため、主体的に取り組まなければ解決できないケースがほとんどである。現場では指示を待つだけではなく、自分がやるべきことは何か、課題解決に何が必要なのかなどを考え、自発的に取り組むことが求められる。また、インターンシップ中の終盤にはプレゼンテーションの機会が設けられており、課題解決に向けて確実に行動することが必要とされる。課題解決の過程で、１人で完結できることはほとんどなく、他者（学生同士、従業員）に働きかけたり、巻き込むことも欠かせない。そのため、「前に踏み出す力」が向上することが想定される。

第２に、「チームで働く力」すなわち発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性の向上が想定される。現場では従業員や学生同士との共同作業が主で、チームワークが求められる。また、受入れ先のルールや担当者の指示に従うことが求められ、規律性の向上も期待できる。

第３に、「考え抜く力」すなわち課題発見力、計画力、創造力の向上も予想される。本インターンシップでは課題解決に向けて、現状を分析し目的や課題を明らかにする必要がある。また、10日間という限られた時間の中で、課題解決に向けた実現可能な行動計画を立てることが求められる。同時に創造力を発揮しなければ提案を行うことはできないことから、「考え抜く力」も大いに鍛えられる。

以上のように社会人基礎力が実社会の中でいかに実践されているのかを学ぶことのできる貴重な機会となっている。



Ⅶ．「地域キャリア修了演習」

１．授業の形態・教育目標・ねらい

【授業の形態】

「地域キャリア修了演習」は、かごしまキャリア教育プログラムの「基礎」が既習得であり、「実践」が既習得または同時履修中である学生を対象とした授業である。本授業では、地域リサーチプログラムおよびグローバル教育プログラムと合同で行う地域人材育成プラットフォーム成果報告会に向けて、受講生は次の課題に取り組む。（１）かごしまキャリア教育プログラムにおけるこれまでの学びに関する振り返り、（２）地域キャリア・インターンシップを通した自身の成長・課題に関する発表資料の作成、（３）成果報告会における発表。授業は、複数の共同担当教員で

実施し、個別指導にて発表資料の作成に関する助言を行う。

【教育目標・ねらい】

本授業の教育目標は、第１に、地域に対する自己の理解や意見を表明できるようになることである。受講生は、かごしまキャリア教育プログラムの「基礎」の授業および「実践」のインターンシップを通して、地域の個別的かつ具体的な課題に向き合う中で、自身が何を考え、どのような取り組みを実行したかを振り返り、整理し、さらにそこから新たな課題を提起する。以上の作業を通して、地域に対する自身の理解を深化させることで、社会人基礎力の「考え抜く力」を鍛錬する。

第２に、最終成果報告会に向け準備計画を綿密に立て、実行することで、計画力と実行力を十分に発揮することを目標とする。

第３に、成果報告会において、自分の意見をわかりやすく伝える発信力を発揮することを目標とする。成果報告会では学生は、学内外のさまざまな人に向け発表を行う。自分の意見をわかりやすく伝える発信力だけでなく、立場の異なる人の意見を聞く傾聴力、さらにはさまざまな立場の人を配慮した言葉選びなど、複合的な社会人基礎力を育むプログラムとなっている。

２．授業の構成（日程）・教育の過程

毎年１月に開催が予定される地域人材育成プラットフォーム成果報告会に向けて、（１）「地域キャリア修了演習」の受講生全体に向けた説明会が10月～11月の間に２回、（２）学生と担当教員の個人面談が10月～１月の間に複数回、（３）「地域キャリア修了演習」の受講生と担当教員全員を前にした中間発表が12月に１回、（４）１月の成果報告会前にリハーサルが１回行われ、これらの段階を経て十分に準備してから、（５）成果報告会において個人発表が行われる。

（１）受講生全体に向けた説明会では、成果報告会の日程、発表方法、個人面談の担当教員などが受講生に知らされる。学生と担当教員との間で、面談の日程と、いつまでにどの程度発表準備を進めておくかなど大まかなスケジュールが組まれる。

また、前年度の学生の発表資料などを参考に、成果報告会に向けて、これから作成しなければならない資料の全体的なイメージを学生は掴む。成果報告会は例年、ポスター発表の形式で行われる（キャリア、地域リサーチ、グローバルの各プログラムの代表１名は口頭発表）。受講生は学部の３年生（2023年度より２年生も受講可能）であり、ポスター発表を初めて行う学生も多いので、ポスター作成手順のレクチャーや、ポスター発表形式で行われた学会の動画視聴などが、受講生全体を対象とした説明会において行われる。

（２）担当教員との個人面談において、発表のテーマ、構成など具体的な内容が練り上げられる。学生は、発表資料を作成しながら、これまでのキャリアプログラムにおける学習やインターンシップでの活動を振り返る。インターンシップで自身が提案した企画の不十分な点や、発展可能性、インターンシップで行った活動の意義などを言語化していく。

また、発表資料が誰に対してもわかりやすく伝わる構成になっているか、公開するデータとして問題のあるものはないか、不適切な表現が含まれていないかなどの点検も慎重に行われる。

（３）中間発表では、発表の構想をキャリア修了演習の全受講生と全教員の前で発表し、意見交換を行う。伝わりにくい構成になっていないか、発表全体の中でどこに力点をおいて発表すると、多くの人にとってより興味深い内容になるかなどの確認が行われる。

（４）成果報告会直前のリハーサルでは、本番により近い形式で発表の練習を行う。ポスター発表に向け、完成したポスターを用いながら、質疑応答のシミュレーションが行われる。あらかじめ作成した原稿を読み上げるのではなく、近い距離にいる質問者に対し、口頭で自分の考えを話すというスタイルでの発表に慣れておくことが目的である。

（５）成果報告会では、鹿児島大学の学長や理事、学内外の大学教職員、学生、学外の地域人

材育成プラットフォーム協力企業・団体（インターンシップ先の企業や協力団体を含む）等の関係者、取材のメディア関係者に向けて発表が行われる。コロナ禍の影響もあり、年度毎に開催のされ方は多少異なるが、2022年度は次のような仕方で成果報告会は行われた。

まず、参加者全員の前で、キャリア、地域リサーチ、グローバルの各プログラムの代表者が１名ずつ14分の口頭発表を行った後、ポスター発表を行う学生の１分プレゼンテーションが行われる。その後、聴衆は１分プレゼンで興味を持った発表者のポスターに向かい、発表内容の詳細について発表者と質疑応答が交わされる。ポスター発表は、前半組と後半組に分かれ、前半組がポスター発表を行っている間は、後半組が zoom で遠隔参加者に向け発表を行い、後半組のポスター発表の間は、前半組が遠隔参加者に向け発表を行う。

成果報告会は2019年度から行われている。「地域キャリア修了演習」の学生は、2019年度は「ポスター賞」、2020年度は「大賞」、2021年度は「最優秀賞」および「優秀賞」、2022年度は「ポスター賞」を受賞している。

３．工夫

本授業は、かごしまキャリア教育プログラムの全課程を総括して振り返り、その上で学生が自身の成長を確認し、言語化する機会となっている。学生は、インターンシップの具体的な活動を通して得た知見を整理しながら、地域の課題に対し自分の主体性や課題発見力が発揮されたか、他者との協働において楽しかった点、苦労した点などを改めて見つめ直すことで、今後の活動に向けて自律的に思考を深めることができる。

本授業は個別指導のスタイルで進行し、成果発表会の前に、学生が口頭で自分の考えをアウトプットする機会が多く設けられている。自分の独自の経験や、その経験を通して考えたことを、自分の言葉で、わかりやすく伝えることが要求される。教員だけでなく、学生間でも意見交換を交わす機会が多く設けられているので、わかりやすく伝える力だけでなく、多様な他者の意見を丁寧に聞く傾聴力を育むことができる。

また、個人面談や中間発表で発表内容をよりよいものにブラッシュアップしていくには、計画を遂行する力とともに、他者への働きかけも必要となる。面談に合わせて、計画を着実に進めるとともに、面談の前に発表資料の作成にあたりどのような点に困難を感じているかを整理し、質問の要点を絞っておく、必要であれば、面談日を追加するなど、学生から教員へ積極的に働きかけることが推奨される。また、成果報告会の前に、中間発表やリハーサルを通して、担当教員とだけでなく、できるだけ多くの人と意見交換することが推奨される。

成果報告会において学生は、鹿児島大学の学長や理事、学外の企業・団体等の関係者、メディア関係者など、学内外のさまざまな人に向け発表を行う。発表準備段階において、さまざまな立場の人を配慮した、情報の選択や言葉選びをする必要がある。発表者は、発表資料を早めに準備し、成果報告会の前にインターンシップ先の企業に発表資料を送り、発表資料に問題のあるデータが含まれていないかなどの事前確認をしてもらう。学部３年生の段階で経験している大学の他の授業における発表よりも、より丁寧な点検作業が求められる。

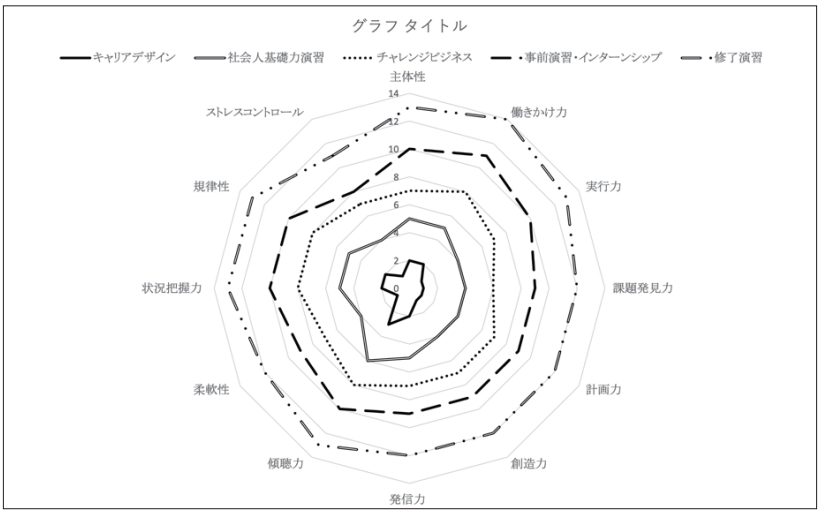
また、自分と同世代の学生だけでなく、より広い層の人々に向けて、自分の経験や考えを伝える機会をもつこと、また、担当教員からだけでなく、学長や理事、学外の企業関係者から評価される機会をもつことは、学生にとっては、大きなモチベーションアップになると考えられる。

４．想定される社会人基礎力の身につき方

これらの作業を通して、学生は、「考え抜く力」やわかりやすく伝える発信力だけでなく、主体的に働きかけ実行する力、自分とは異なる相手の立場を理解する力、周囲の人々や物事の関係

性を理解する力、社会のルールを守る規律性などを育む。本講義の対象となる学部３年生にとっては、成果報告会での発表はプレッシャーも大きいと考えられるが、多角的な視点をもって思考し表現するということを実践的に学習することで、複合的な仕方で社会人基礎力を育む機会となっている。

以上から、本授業を通して向上する社会人基礎力はこれまでのプログラム科目とともに描けば、次のようなものとなる。



Ⅷ．おわりに－「かごしまキャリア教育プログラム」における「社会人基礎力」育成の特徴

本プログラムを構成する主要な科目について、それぞれの「授業の形態、教育目標、ねらい」にはじまり、「授業の構成、教育の過程、教育上のツールや工夫」などを論じてきた。主要な各科目において「想定される社会人基礎力の身につき方」、言い換えれば、習得が見込まれる社会人基礎力の期待値を示してきた。それをわかりやすく提示したものが各パートの後段に示したレーダーチャートである。

５つのレーダーチャートは実証値ではなく、あくまで期待値に過ぎないので、実際に習得した能力について論じることはできない。しかしながら、「社会人基礎力」が主要科目を縦断し連続的に育成されているという点には注目してよい。レーダーチャートの通りにとはいかないまでも、受講生は樹木の年輪のように、本プログラムを進むたびに「社会人基礎力」を増強していることになる。

受講生は「キャリアデザイン」で「内的キャリア」への着眼や自己理解によって、「社会人基礎力」の領域を意識する。次の「社会人基礎力演習」では、マネジメント理論をヒントに「社会人基礎力」の実在性や必要性を改めて認識し、授業後半のバーチャルな課題解決を含むグループワークやロールプレイを含んだ擬似経営会議において同能力の活用に挑戦する。つづく「チャレンジ・ビジネス」では実際にプロジェクトを受講生自身で運営することから、プロジェクト組織の運営とともに人間関係の形成や維持までも含めた高いレベルの「社会人基礎力」が要求される。「地域キャリア・インターンシップ」では、実際の職場での就業や問題解決を体験することで、「社会人基礎力」を十分に発揮せざるを得ない状況を経験する。最後の「地域キャリア修了演習」の地域人材育成プラットフォーム成果報告会では、ここにいたるまでに習得したキャリアに関する知見や「社会人基礎力」を総合的に振り返り、習得したものを地域の企業や自治体、経済団体、大学関係者などのオーディエンスへ向けてプレゼンテーションすることが要求される。

以上のように、本プログラムは１つの科目のみで習得させる「一過性」の「社会人基礎力」の教育ではなく、まさにプログラム全体で段階的に少しずつ、何度も反復しながら「社会人基礎力」を鍛えていく、いわば「社会人基礎力」についての有機的な連関を持った連続した科目による育

成プログラムという特徴を備えている。「社会人基礎力」はコンピテンシーの要素が強く、暗記することで習得できるような代物ではない。レーダーチャートによって示された少なくとも５層の年輪のように、PDCA サイクルを何度も繰り返すことではじめて育成することができる。このような「社会人基礎力」の特性を踏まえれば、本プログラムは同能力の育成に適合的な科目構成となっていると言えるだろう。

さて、主要科目についてのレーダーチャートを観察すると、期待値とはいえ次のような特徴が見えてくる。すなわち、本教育プログラムの「基礎」および「実践」を修了できれば、受講生個々人に差はあるものの、社会人基礎力のおおよそ全ての項目が強化されうるプログラムになっているものと評価できそうである。とりわけ「前に踏み出す力」は、本稿で取り上げた全科目で高スコアであった。例えば「社会人基礎力演習」では、不要にあれこれと考えるよりも、まずやってみること、行動することの大切さを教えていることから、教員の指導としても、また受講生の学びの態度としても、前に踏み出すことに暗に優先順位を付していた可能性が考えられる。一方、「ストレスコントロール」のスコアが低い。これは教育プログラムへの組み込みの困難を示していると解釈される。今後は、「ストレスコントロール」の強化を実現しうる課題の設定方法、指導のあり方等をさらに検討、開発していく必要がある。

参考文献

・鹿児島大学キャリア形成支援センター編（2023）「鹿児島大学キャリア形成支援センター　課題解決型インターンシップ / キャリア実習　ガイドブック」.

・木村周（2016）『キャリアコンサルティング　理論と実践』４訂版 , 雇用問題研究会.

・経済産業省産業人材政策室編（2018）「人生100年時代の社会人基礎力」経済産業省．以下の URL は国立国会図書館インターネット資料収集保存事業（WARP）の所蔵を指す。［2023年11月30日閲覧］
https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/13022278/www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/007_06_00.pdf

・シャイン，エドガー / 金井壽宏訳（2003）『キャリア・アンカー』白桃書房.

・社会人基礎力に関する研究会編（2006）「中間取りまとめ」経済産業省．以下の URL は国立国会図書館インターネット資料収集保存事業（WARP）の所蔵を指す。［2023年11月30日閲覧］
https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3196221/www.meti.go.jp/press/20060208001/shakaijinkisoryoku-honbun-set.pdf

・村山昇（2018）『働き方の哲学』ディスカバートゥエンティワン.

Structure of the Kagoshima Career Education Program and the Role of Each Subject
-Essential Competencies-

FUJIMURA Ichiro, KAWABE Kotaro, OMAE Yoshikazu, MATOBA Chikayo, JIANG Shan

Keywords: Career Education, Internship, Essential Competencies, PBL (Project Based Learning), PBL (Problem Based Learning)

This article discusses the Kagoshima Career Education Program implemented at the Kagoshima University. This article focuses on how the *essential competencies* advocated by the Ministry of Economy, Trade and Industry are embedded in this educational program. The reason is that social demands for essential competencies are increasing. Although higher education institutions emphasize essential competencies, the study avoids the inference that educational methods have been established. Thus, the staff of the Institute for Comprehensive Education developed the Kagoshima Career Education Program as an educational program in response to the social demand for the development of *essential competencies*. This article outlines the intentions and ingenuity of development per class that compose the Kagoshima Career Education Program and discusses the contribution of the entire educational program to the development of *essential competencies*.

Based on the aforementioned interests, this article is structured as follows. We begin with an overview of the undergraduate inter-disciplinary education programs of Kagoshima University for regional talents as bachelors and the Kagoshima Career Education Program. Afterward, we will discuss the characteristics of each major subject in the following order: Ⅱ : Career Design, Ⅲ : Essential competencies, Ⅳ : Challenge Business, Ⅴ : Regional Career Internship Preparatory Exercises/Regional Career Internships, and Ⅵ : Regional Career Internship Completion Exercises. These orders are in accordance with the course registration process of students.

When discussing the Kagoshima Career Education Program, we approach it from the following points. The first is the basic information for each subject such as the format of classes, educational goals, and aims. Second, we will discuss the schedule and educational process regarding the structure of classes. Third, we will discuss the tools, teaching materials, and educational devices used in classes along with their educational effects. Fourth, the expected value of *essential competencies* is demonstrated using a radar chart. We will then explain the characteristics of each subject, focusing on *essential competencies*.

Through these considerations, we intend to elucidate the method for developing *essential competencies* under the Kagoshima Career Education Program. The authors hope that the experience of Kagoshima University will be widely applied to higher education institutions. In addition, by elucidating the advantages and disadvantages of the Kagoshima Career Education Program, we will consider future issues for our program.